

2013 年度後期授業評価アンケート集計結果に対するコメント

—経済学研究科—

経済学研究科長 浅井良夫

アンケート調査に対する大学院学生諸君の協力を感謝します。

今年度前期の大学院全体の集計結果からみて、昨年度と同様に、大学院の授業はおおむね高い評価が得られたと思います。これは、どの授業でも徹底した少人数教育により、密度の濃い双方向性の授業が相当程度実現していることのあらわれだろうと判断します。

全体としての高い評価の中で、相対的に評価が低めに出た項目は、昨年度と同様で、14)「予習または復習をよくした」、6)「この授業のレベルはあなたにとって適切であった」、の2項目です。

これらの項目の平均評点について経年推移を、一昨年度の前期・後期・昨年度の前期・後期・今年度の前期・後期で並べて点検してみると、14)は 4.13 → 4.22 → 4.31 → 4.36 → 4.30 → 4.30 であり、昨年度までの改善のあと若干低下していますが、6)は 4.43 → 4.45 → 4.49 → 4.47 → 4.55 → 4.56 であり、改善の傾向が認められます。

今回は 2)「授業中意欲的に取り組んだ(ノートをとる等)」が 4.68 で、平均評点の低い項目の3番目に現れていることは上記 14) の低下とともに気がかりな点ですが、4)「休講または教員の遅刻が多かった」(逆転計算項目)は 4.58 → 4.53 → 4.56 → 4.69 → 4.73 → 4.68 であり、最近の改善傾向は好ましいことです。

大学院では学生諸君のそれぞれの専門的な研究分野がはっきりしていますが、それだけに、近接領域の授業の履修等を通じて複数の教員から多角的な見方を学び、広い視野を獲得することはとても大切です。今後も、大学院担当教員全員が日々工夫努力して、双方向性の実を高め、履修者の学修意欲をさらに伸ばすことができるような授業展開をはかることが期待されます。